

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 李文淑

本論文は、韓国語（朝鮮語）のアクセント研究の中でも先行研究の少なかった全羅道方言について、全羅北道全州方言と全羅南道光州方言を代表として取り上げ、そのアクセント体系と特徴を詳細に記述し、これら2つの方言の比較やそれぞれの方言における世代差などを考察して、これらの方言が現在アクセント変化を経験しつつあることを明らかにしている。次いで、これらの方言と、アクセントの弁別性が完全に失われているソウル方言を比較して、ソウル方言もかつて全羅道方言のような段階を経て現在の状態に至ったものと推論している。さらに出自が韓国南部の慶尚道方言であることが分かっている、中国黒龍江省尚志市に住む朝鮮族の方言に関して、慶尚道方言との比較により現在アクセント変化が進行中であることを明らかにし、最後に以上すべての方言で観察されるアクセント変化に基づいて、韓国語におけるアクセント変化の一般的傾向を探ろうとするものである。

韓国語の諸方言の中で、単語における相対的な声の高さが決まっているピッチ・アクセントをもつ方言としては、従来、慶尚道方言と咸鏡道方言が知られていたが、本論文で中心的に扱っている全州、光州などの全羅道方言は、ピッチ・アクセントの存在自体がほとんど知られておらず、詳しい先行研究が少なかった。本論文の第一の意義は、このような方言について詳しい調査を行って記述をしている点にある。代表として全州、光州の方言を主に取り上げているが、実際にはその周辺の十数地点について詳細な調査を行っており、調査項目も、単純名詞、複合名詞、漢字語、外来語、用言およびその活用形を含む詳細なものである。全羅道方言のアクセントについてのこれほど大規模な調査はこれまでになかったもので、大変貴重な貢献である。次に、ソウル方言についても詳細な記述と、その成立に関する歴史的な脈絡を与えたことも本論文の意義としてあげることができる。ソウル方言は弁別性が完全に失われている点では全羅道方言と異なるが、音調型そのものの類似性のほか、それが語頭子音の種類に左右されること、また言い切り形と接続形の区別などの点において、全羅道方言との密接な関連が見られ、その成立について手がかりが得られたことは貴重な貢献である。さらに、韓国語におけるアクセント変化の一般的傾向をまとめている点も高く評価することができる。同様の試みは日本語については金田一春彦によって夙に行なわれているが、韓国語については本論文が初めての試みであると言っても過言ではない。

本論文の課題としては、記述が若干分かりにくいところがあることと、本格的な歴史的研究のために他方言も視野に入れる必要があることなどがあげられるが、上に述べたようにこの論文の学術上の意義と貢献はそれらを補って余りあるものである。以上の理由により、審査委員会は、本論文を博士（文学）の学位を授与するに値するものとの結論に達した。